

張赫宙「権といふ男」小考

二〇二

任 時 正

朝鮮人作家張赫宙の小説「権といふ男」は雑誌「改造」（一九三三年二月）に発表された。後、作品集『権といふ男』（一九三四年六月・改造社）、自選集『愚劣漢』（一九四八年二月・富国出版）、『現代日本文学全集 八七巻 昭和小説集』（一九五八年三月・筑摩書房）に収められた。

「権といふ男」を発表するまでの作家張赫宙について紹介する。

一九〇五年十月五日、朝鮮慶尚北道大邱に生まれる。生まれて間もなく、父と離別した母に連れられ、しばらく母の実家がある長淵で暮らす。まもなく、飲食店を営んでいた母と慶尚道地方を転々とする。小学校へ入る頃ようやく、慶州へ落ち着くが、高等普通学校（今日の中学校）へ入ると同時に、大邱へと戻る。この頃結婚し、四人の子を儲けた。高等普通学校を卒業して、教員となり、醴泉、青松などの慶尚北道で生活。教員検定試験に合格、訓導の資格を得ると大邱の喜道小学校に就任、その住み家を再び大邱に移る。この頃菊池寛の「我鬼」という小説を読み、利己的な人間描写に感銘を受け、小説家になりたいという夢を持つようになる。以後、日本と朝鮮の雑誌に作品を書いて、応募しては落ちるという生活がはじまる。

一九三〇年十月、ようやく雑誌「大地に立つ」へ短編小説「白楊木」^{ポブラ}が載せられるが、日本からの反応はなかった。一九三二年四月、雑誌「改造」に応募した短編小説「餓鬼道」が二等当選となる。この当選を

改造社は、「今回本誌の懸賞募集一千二百のうちから、張赫宙氏が当選したことはいろいろの意味において記念すべきことである」^①と絶賛した。張赫宙は「餓鬼道」の日本の反応に自信と力を得、教員をやめ、大邱と東京とを往来しながら、漂流するように生活していた朝鮮の土地を題材として作品を書いて行く。夢であった作家としての人生を歩みはじめたのである。

当時、日本で作品を発表した殆どの朝鮮人は留学した人か朝鮮で作家活動をしていた人たちであった。張赫宙のように日本語で書いた作品をはじめから日本の文壇に発表するのは稀であった。朝鮮人作家、張赫宙の日本語力はどれ程のものであったのか。また、小説家としてのデビューが朝鮮でなく日本であったのはなぜであるか。張赫宙は自分の日本語と朝鮮語の実力について、「はじめから私は日本文壇へ入ろうとした。その主な理由は私の言語能力が、私の受けた教育のせいで朝鮮語より日本語の方がより優秀である」^②と言っている。張赫宙の日本語力について、「どうして朝鮮で連載されている「^{むじげ}무지개」（日本語訳…虹）^③らより、日本語の文章のほうがなめらかで輝くように見えるのか。」と、不思議がつている朝鮮の作家もいる。このように朝鮮生まれ、育ちの人が朝鮮語より日本語の方が上手いというのは、不自然と思われる。しかし、朝鮮の南地方で生まれ、標準語を駆使することの出来ない作家にとって、慣れない標準語で作品を書くより八歳から学び始めた日本語（張赫宙が小

学校ではじめて学んだ文字は国語―日本語―であった。の方がなじみやすく、自分の感情を表現しやすかったのかも知れない。また、言葉だけでなく、文体に於いても当時、朝鮮と日本の文壇では相当違うところがあった。その違いを玄民は「餓鬼道評」で次のように言っている。「朝鮮語で発表したら、好評は得られなかっただろう。朝鮮ではまだ、美文、滋味あるストーリーが歓迎される段階である。だから、張赫宙のあくまでもリズム的な姿勢は理解しがたいものである。」結局朝鮮語より日本語に親しんできた彼の言語環境が日本語表現による小説の日本文壇デビューへの主な理由となったのであろう。ところで、朝鮮での朝鮮語作品発表は、一九三三年九月二十日、「東亞日報」に連載された「무지개」が初出となる。この頃になると、日本での作品もその作風に変化がおこる。それまで影響を受けていた、「餓鬼道」ら初期作品に見られる社会の矛盾に目覚めて行く農民、労働者たちの社会運動などを題材にしていた所謂プロレタリア文学から距離を置きはじめて、個人の心理などをも書くようになった。「権といふ男」は、そうした個人心理小説のはじまりの小説である。

小説「権といふ男」の梗概は次のようである。

「夕方、私たちは市場の方へ酒を飲みに出かけた。三日に一度は、私たちは市場に行った。」私たちが市場へ行くのは酒を飲むためである。では、なぜ、酒を飲むのかと言うと、「下宿の裏や鼻さきに迫ってきている丘の松林のように、私自身、一種の植物になってしまふ」ほどこの村が淋しいところだからである。このような淋しい村に酒を飲むところはなく、洛東川上流にある市場まで出かけるのである。なぜ、酒を飲むのに市場なのかと言うと、田舎で酒を飲もうとすると市場しかなかったからである。朝鮮の市場は「ジャン」と呼ばれ、市場へ行くことを「ジャ

ン見に行く」と、表現する。市場は買い物だけのところではなく、見るものの多い遊び場としての役割もあった。酒を飲みに行く「私たち」というのは、梨村の小学校に勤めている三人の先生のことである。「権といふ男」はこれら先生たちが勤めている、日本人校長をのぞくと三人しかない四学級の小さな世界で起こる小さな権勢争いの話である。

私（金東二）はこの学校に辞令をもらうとすぐに虫眼鏡を地図に当ててはこの村を探したが、みつからない。それもそのはず、この村へ来るためには、汽車と車、それと四里ほど、溪谷を上ったり下ったり、胸まで水量のある川も三回も渡らなければならない。地球の果てにへでも来たような二十四五軒ある小さな梨村へ着いた私は「これは又、馬鹿に大きい学校を見つけた時は、全く情けなくなるのを覚えた。」のである。

私は、一時期ではあるが、社会運動に猛烈な情熱を注いだこともあるし、教員でありながらも、ある目標を立てて勉強している、わりとしっかりした青年のほずであった。そんな私が淋しい淋しいとひどく寂しがつていると、同僚の尹と柳は、「ぢや、麻田の市場につれていてやろうか。」と、私を市場へ案内してくれた。市場は私が梨村へ来るため、三度も渡った河の本流岸にあった。市場は広場を中心に広がっていて、広場の両側に、四五軒の店―牛肉店、雑貨店などと、六七軒の酒屋があった。そのなかにも村一番の美人で面白いという評判の「金成局の女」と呼ばれている酒屋に尹らは私をつれていった。私たちは三日に一日は金成局の女のところへ通い出した。ある日の帰り道、柳は「きようは違ふところへ連れていてやるよ。」と、私を誘う。私より四つくらい上の背の高い面長顔の痩せ型の柳は、一癖ありそうな目をしている。それが笑うと目尻がまるく皺くちやになって子供のように親しみやすくなるのである。柳は尹の残っている「金成局の女」の方をしきりに気にしながら、「金成局の女」の向かい側の四軒ほど北側にある酒屋へと私を連れ込ん

だ。私の下宿も「金成局の女」もそうだが田舎の家はゴミに埋もれたように、壁紙も温突に敷く油紙もない。それに比べてこの酒屋は、都会的な内装で温突も綺麗に磨かれていた。そこで私は今まで会ったことのない壮漢に出会う。「彼が胡座をかいて、腹をつき出して座っている姿は、ちょっと奈良の大仏や、恩津の弥勒仏といった感じである。」「顔は、石仏のように巨きかったが、仏像のような柔和さは無論なかったし、そうかといって、例えば、仁王像のような凄みもなかった。」その人が学務委員の権であった。はじめてあった権は酒代を聞く私たちに、今日は私がおごったのだといって、「何をいつて居るのです。そんなことをいうものぢやありませんよ」と怒った。それを面白いとも男らしいとも思っただけは権が好きになって来る。尹に権の酒屋に行ったことを秘密にするように頼まれた私は、翌日、尹にきのうのことを聞かれ、また、それを見た柳からは尹にきのうのことを言ったかと責められ、なんだか厄介なことに巻き込まれるような気がして不愉快にある。私が巻き込まれたのは、権と尹、どっちが学校の教務権を握るか、ということであった。教務を担うためには、学務委員に選出されねばならない。が、学務委員は官選（学校の職員会で推薦したものを郡守が都知事に報告、都知事の辞令、学務委員となる）であったため、その推薦権を持つ私を自分の味方にしようという渦中だった。だが私はと言うと、権のところへ行けば、権の話しが正しく、尹のところへ行けば、尹が正しいと思う。

冬休みになってみんなが実家へと帰り一人梨村へ残った私は（ただ十日あまりの休みなのにまた、溪谷や川を渡らなければいけないと思うと、思うだけでいやになったのである）、淋しくて友だちがほしくなる。権と尹の争いに疲れもしないこの男はその新しい友人として社会運動家の李を選ぶ。同様に飢えていた李は私を信じ、急速に親しくなる。秘密に李の仕事を手伝っていた私は市日の日、偶然権に会い、彼の酒屋へ行く。酒屋

に行っただのはよいが、自分が昔社会運動に携わっていたことと李のことをしゃべってしまう。果たして、数日後、李が逮捕され、私は権にどんなでもない弱点を握られる。学務委員選出の日、私はいやおうなしに、権を選ぶ。「きみが裏切ったばかりに、権の出しゃばり様たらないぢやないか。」と尹が私に責めて来、殴り合いの喧嘩となってしまう。その後尹は、権の密告によって（尹は学校の運営金を不正に使っていた）この村より二倍も辺鄙な地方へ転勤となる。私は権に握られた弱点を取り戻すため、権の弱点を探りはじめる。その時「普通の濁酒、薬酒や日本酒では、奴のぶかぶかした腹のなかや胸のむかつくのがだまらないのさ。焼酎か、在来清酒がないと、生きられないんだよ。」と言った尹の言葉を思い出す。密造酒の証拠をつかもうと権の酒屋へ通っていたある日、権を酔わせることに成功した私は、密造の工場を確認する。これで権との関係が対等になったとほっとする私であったが、自分の不正がばれるのを恐れた権が私を警戒しはじめ、二人の間はますます険悪になって行く。いつ爆発してもおかしくなくらい積もり積もった二人の焦立ちはある夜、権の酒屋で衝突し、喧嘩のあげく庭に投げ出された私は数日後、教員を免職となったのである。

私を訪ねて来た権は、私が梨村を出るまで、私のそばを離れなかった。 「権といふ男」が書かれたときの心境を張赫宙は次のように言っている。

「餓鬼道」ら初期作品は、自民族の困窮と悲哀を訴えるという一点に、作家の情熱が集められていた。が、いつまでもそれだけでは、文壇では通らなくなった。ある批評家からは、この作家は、早や行

詰ったと言われたが、私自身もそう思って絶望していた(略) 私はその頃毎日山野を一人歩きして、考え込んでいた。と、ある日、新しい途がさつと心にひらめいた。私は夢中で、それを作品化して「改造」に送った。それが「権といふ男」で、先にこの作家は行詰ったといった同じ批評家に激賞されたのであった。私はつづけざまに「ガルボウ」「十六夜」と書きつづけた。この期に属する作品で、私の作家的地位は確立し、今日に及んでいる。

「権といふ男」には人間の誰もが持つ権力への憧憬、嫉妬、知識人の現実生活における愚かさなどが書かれている。張赫宙は朝鮮のある村を舞台にして、人間と自然、人間とその生活心理を表現しようとしている。この作品の舞台が朝鮮でなければならない理由は、張赫宙が朝鮮人であり、その地で生活していたからである。張赫宙の漂流するようなこれまでの生活が、作品に素材だけでなくテーマまでも与えている。なぜなら人間相互間の微妙な生活心理、生活態の奥に潜んでいるものを生成するのは人間の住処、つまり土地であるからである。

これら小盆地や溪谷の住民の世界観の狭さを非難することは無駄である。吾々は彼等の意欲が非常にはつきりし、本能的な強烈さを持つていることに興味を持つだけでよい。物欲も名誉欲も溪谷のようには狭い、狭いが峻烈である。小世界ながら我意を通すことは苛酷である。平地地帯のように亭楽的ではないが、色慾の向^{ママ}つても徹底である。私はこういう峻険な山勢と雄大な溪谷と鮮明な季節美と、苛烈な人間の意欲とを渾然と解け合わせて物語を造ろうとした。それが「ガルボウ」である。又、他面の小権勢慾に取材して「権といふ男」を書いた。「権といふ男」は大部分実話で、主人公の権^⑥氏は

まだ六十になっていないだろう。愛すべき小意欲人である。^⑦

張赫宙は自分の作品に使われる土地柄とそこに住む人間たちへの関心を「私の風土記的興味」と説明しているのである。作品生成の基となった土地、その地を舞台とした「権といふ男」の面白さは、知識人の愚かさにある。社会運動に全力を注ぎ、その運動から離れた時に感じた虚しさに負け、何ごとにも興味を感じなくなった私^⑧金東一は語り手という身分でありながらも権の所へ行けば権がよい人物で、尹の話しを聞けば尹がよい人物であるように思われ、二人の間を行ったり来たりする軽薄さを見せるのである。張赫宙はこの軽薄な語り手、私^⑧金東一に加えてもう一人の語り手を用意している。この第二の語り手は梨村を舞台に繰り広げられる人間喜劇を第三者視点人物を設定して、眺めているのである。その眼は登場人物に対してけっして軽蔑しているのではない。むしろ愛情を持った眼である。またこの作品のもう一つのテーマは、外から見ればちっぽけとも言えるような権力に執着するけちくさい男たちの形象であろう。権の権力に対する執着はしつこく強いものである。権は新しく赴任して来た世間知らずの私を手だまにとっている世渡りの上手な人物として登場する。が、少々酒に酔っぱらって気を許したとは言え、密造のことを自分から白状しただけでなく、その工場までをも見せるところは私とそれほどかわりのない愚か者の一人であるように思われる。自分への信念をなくし、どっちにもつかず、そうだと言って離れることも出来ぬ私と、大地主でありながら酒屋を営んでいる権の権力に対する病的な執着を愚か者と否定しないのは、語り手である第三視点^⑨作者の登場人物たちへの愛情があるからである。

「権といふ男」の同時代評を紹介しておく。

逸見廣は、「権といふ男」の新しいさを「最近の張君は、嘗て外にのみむけられていた目を内に向け始め、他の文学からの影響を清算して、自分自身の文学の確立に向かい始めた事は確かである。」と評して、「嘗ては殆ど描かなかった個人を描き始めたのもその結果であり、「権といふ男」や「ガルボウ」に於て同民族中の不逞漢を批判した事などもその現われであろう。(略)それら人間の間に起る異様な葛藤と、凡そ非日本的な道義観念の精力的な描破は、氏の嘗ての文学には殆ど見られないものであった。」^⑧と、個人を描きはじめてこと、人と人とおこる葛藤などの人間心理に新しさがあると評価している。

一方、朝鮮では、「張氏の国語力には驚いたが、氏が氏の能熟な国語だけを信じ、朝鮮人生活に知識のない人に対して悪いイメージを与えるような作品を書くのはよしてほしい。」^⑨という批判が多かった。朝鮮での批判に対して、張赫宙は、「真の芸術とは、ただ生活を描くだけではない。ということに気がついたです。(略)朝鮮文壇では批判が多かったようです。朝鮮人の醜態を見せたとかで、私はただ人と人との微妙な心理状態と人情風習を真実に書いた^⑩」と反論したのである。こうした国内外の評に対して張赫宙は、「権といふ男」、「ガルボウ」などが今度は異国情緒という面ばかり受け入れられたことに(略)私はむしろ人間の利己慾、醜悪というものを憎悪、嘲笑し、また風刺するためにそのような主題を選んだ。(評者)の見識が狭く卑しいことに寂しさや不満を感じる。」^⑪と、作品のなかに潜んでいる作者のメッセージを誰も評価しないことを悔しがるのである。

つまり、この小説は自分への信念をなくし、どっちにもつかず、そうだと云って離れることも出来ぬ、私(金東一)を通じて、朝鮮同胞への愛情あふれる忠告としたとこにこの作品の魅力と評価が存するのである。数え切れないほど他国からの侵略に耐えられて来た朝鮮の支配階級

は、その度忠誠を誓うことで自分たちの権力を維持することが出来た。外から見ればちっぽけとも言えるような権力に執着し、民衆のことをかえりみなかった朝鮮末期両班の横暴に対し、知識人は抵抗し、社会改革を夢見、社会運動に励んだが、権力に破れて、その次進むべき道がわからないまま、何事にも興味をなくしてしまった知識人たちの無力さを張赫宙は金東一を通して表現したのである。

注

- ① 「改造」編集だより 一九三二年四月
- ② 張赫宙「나의 作品雜感」 「三千里」 一九三八年五月(日本語訳：私の作品雜感)
- ③ 姜敬愛「張赫宙先生に」 「新東亞」 一九三五年九月
- ④ 玄民 文芸時評「張赫宙의 近作」 「東亞日報」 一九三三年十月六日(日本語訳：張赫宙の近作)

⑤ 張赫宙「愚劣漢」 はしがき(一九四八年一月・富國出版)

⑥ 「綱引」 「帝国大学新聞」 一九三四年六月八日

田舎の人々もこの一二年少しは暮しがよくなったのであろう。今年の陰のお正月にはあちこちの町や村では正月の遊びの一つに綱引をやり出した報が新聞や人伝に聞こえて来た。私は様々の索戦の思い出のうちにも、多分一九二六年の冬の、私が青松郡の或僻村の私立学校の教員をやっていたときの綱引が最も強く印象されている。それは私がこれまで見た最後の索戦であったこと、それにつれて一人の巨大漢を忘れることが出来ないからである。

○

私が索戦の行われる村の河原に行ったのは夜で満月が澄透った空に皎々とさえていた時だった。既に索戦は始まっていた。村々はその川を境界に南北に分かれてわくわくと荒々しく騒いでいた。勝った方の村々は年は万事吉運でうち過ぐすことが出来る、と言われて居り、そうでなくとも、村々の若者達は各自の力自慢をやってみたい時ではある。

殴り合い蹴り合いが始まるのは常例とされていた。だから、両方の綱の繋ぎ目（雌綱の太く巨き輪と、雄綱の貫木とが入り組んであるところ）には敵味方の壮丁が対峙していて、ともすると鉄拳が乱れというところである。私は最初、綱の胴から尾の方の細くなったところにしがみつこうかと思っていたが、婦や小供、老人達の歓声にとり巻かれた二頭の蛇のひっぱり合いを見ると、私の血は胸の中で荒れくるい始めたので、思わず中央の衝突 地帯へ割り込んでいたのだった。だが、一方は太い貫木の上に、他方は中の胴位もある綱の輪の上に、夫々十数人の壮丁が乗っかり、罵り合っていて、私などのつき入る隙はなかった。綱は激しく揺れ、どちらも容易にひきつられることはなかったにしても、ともすると私の体は壮丁達のせり合いや綱の張り切った力に負かされて綱の下敷になるか、壮丁の足にふみつけられそうになった。私が人々のイロイサ、イーヨチャ、と叫ぶ掛け声に応じて綱を引っぱりながら闘っていると、一人の、白い周衣をぐるぐると胴巻きにした六尺豊の壮漢が、白い頭巾をざんぎり頭に巻きつけ、黒い、目玉の大きい顔を私に向けて、えへへへ、と私を指しながら、せゝら笑ったものである。

○

「先生、危えから出て来ませんか」彼は人々の叫び声に負けまいと大きく怒鳴って、再び指を私に向けてせせら笑った。

それが如何にも「お前のような弱虫が」というようで私は癪に障ったが、しかし、日頃あんなに柔順そうに見えた農民達の腕が、まるで棍棒のように固く強いのに内心少なからず吃驚し、私の方は私の意気とは反して、その時早き切ってしまったので、しぶくとその壮漢の言いなりに、やつとのこと人々の体を分けて出て来た私が綱から離れて立つと、いつのまにさっきの男が貫木のそばに寄りそい、いきまいていた。

私はさっき、やつとのこと綱にぶらさがっていたのに、男は貫木や綱の頭を意のままに押しやり、ひっぱりして綱を揺るがすのであった。混み合った壮丁の中にもその身は一方の大壮漢として、彼の後方の数百の味方を指揮していたのだ。彼が大きな声をはり上げてイーヨサ、と叫ぶと、頭から尾端の方まで一斉にイーヨチャと応じる味方は二三間も敵をひきずっていった。敵方も機を見て綱を地にひき、人々の体重でささえ

た。そこで味方も引っぱるのをよして、そのように綱を敷き持久戦に入った。

○

私はそれまでさきの男の動作をみていた。その男は大工で、私に本箱を造らせて金をせびろうとしていた男である。彼は、「先生、いゝ樅の木が手に入りやしたぜ」といって、私が年少なのにとり入って、いゝ値で売りつけようとしていた。私は、彼が日頃は私に丁重だったのに反し、さっき私を嘲笑したことに腹を立て、いると、「へへ。先生、さっきは危えござえやしたぜ」と、彼は私のそばへやって来て、軽く笑った。「あんなところに巻きこまれちゃ、弱い人はいつ死んだかも知れんようになっちゃまずぜ。」

「なあに、これしきの綱にかい」と、私は郷里の綱の三分の一にもならない程短く細い綱だと軽蔑していると

「そらアそうでそうとも。しかし先生。おれ位のだって、一人二人では何うにもなりやしませんぜ。」彼は私が怒っているのに気づき、「しかし、先生があれ程勇気があるとは思いませんでしたよ。」と、私をなだめた。私が仕方なしに笑うと「先生。酒幕へ行っていっぱいやりやせう。」といって人々をかき分けて彼は歩き出した。私は「こいつ、本箱のことを思い出したな。」と思いつ、彼のあとについて河原の人々から離れていったのだった。

⑦ 張赫宙「나의作品雜感」 「三千里」一九三八年五月（日本語訳：私の作品雜感）

⑧ 逸見廣「張赫宙氏の歩いた途」 「文芸首都」一九三四年六月

⑨ 許南期「張赫宙氏の狂女点描」 「新人文學」二六号一九三六年八月

⑩ 「健筆十年の張赫宙氏」 「三千里」一九三八年二月（日本語訳：健筆十年の張赫宙氏）

⑪ 張赫宙「正確なる理解」 「知性」一九四〇年十月

（本学大学院文学研究科博士課程後期課程）